

さくらのなかのさくら

辻 憲男 (文学部教授)

日本人は桜が好きだ。そしてお花見が大好きだ。かの『古今和歌集』にも、「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」という歌がある。花の短い桜だけれど、もしなかったなら春はどんなにあじけないことだろう。在原業平(ありわらのなりひら)はそんな思いを裏返しにして、心さわがせる花への愛着を告白したのである。

「弥吉(やしち)は、竹部の家を辞去して、岡本の駅へ急いだが、世にも不思議な、桜にとりつかれた人を見たと思った。竹部は今日七十五歳である。桜一途(いちず)に生きてきて、すべての財産を投じて、桜の品種改良と、日本古来の山桜の保存育生に身をけずる思いできた」。その竹部が、岐阜県荘川村の御母衣(みぼろ)ダム建設で水没する樹齢四百年のアズマヒガンを移植するという難事業を引き受けた。竹部は弥吉の先生である。武庫川溪谷の武田尾の桜山の番人をして、桜の植生を教わった。老木は再生するだろうか…(水上勉『桜守』)。竹部の実在のモデルは“桜男”こと笹部新太郎。桜の研究に生涯をささげた。しかし水上の小説は、この民間学者ではなく、無名の植木職人を主人公にした。満開の桜の下、弥吉は鉦泉村の生まれの園(その)と結婚式をあげた。桜にほれこみ、滋賀県湖北の海津の巨木の下に眠りたいと望んだ。環境汚染とか温暖化とかにさらされない、里山の美しい桜があった。



桜公園(笹部邸跡)は阪急岡本駅の上りホームからすぐ。